

中国社会科学学会 2021年度大会

2021年7月3日(土) 自由論題研究報告 オンライン開催

司会：吉澤誠一郎(東京大学)

午前の部：10:00～12:30

- 政略結婚から見る五代十国の王国間関係 …………… 劉 揚(東京大学大学院生)
コメンテーター：飯山 知保(早稲田大学)
- 明代紹興の私家園林と園林空間——山陰祁氏の寓園を例として
…………… 庄 涵淇(大阪市立大学大学院生)
コメンテーター：大木 康(東京大学)
- 明末清初における遺民の自己認識——「中華の遺民」と「明の遺民」をめぐって
…………… 顧 嘉晨(東京大学大学院生)
コメンテーター：伊東 貴之(国際日本文化研究センター)

午後の部：13:30～16:50

- 「読む」とは如何なることか——段玉裁『説文解字注』における「読」をめぐって
…………… 建部 良平(東京大学大学院生)
コメンテーター：中島 隆博(東京大学)
- 清末の旅行記から見たインドイメーজ …………… 程 善善(東京大学大学院生)
コメンテーター：小野 泰教(学習院大学)
- 清末中国思想空間の下部構造——雲南留日学生の思想形成を手掛かりに
…………… 董 子昂(北海道大学大学院生)
コメンテーター：吉川 次郎(中京大学)
- 蓄音機文化と左翼音楽——1905-1929年の中国文学作品と論争における蓄音機表象と聶耳を中心に
…………… 藤 束君(東京大学大学院生)
コメンテーター：田中 有紀(東京大学)

会員総会：17:20～18:00 オンライン開催

2021年7月4日(日)

シンポジウム 五代・宋代における仏教の展開と伝播

オンライン開催 10:00～16:30

総合司会：横手 裕(東京大学)・企画趣旨説明：蓑輪 頭量(東京大学)

第一部 中国中心部における展開：10:00～12:00

1. 万象明明として理事無し——法眼文益による華嚴思想の援用とその意義…………… 土屋 太祐(新潟大学)
2. 永明延寿の立ち位置：時代の転換期における禅の捉えなおし …………… 柳 幹康(東京大学)
3. 贊寧『宋高僧伝』に見る唐宋期の教学仏教について …………… 吉村 誠(駒澤大学)

第二部 周縁部への影響：13:00～15:00

4. 契丹(遼朝)治下律僧の様態 …………… 藤原 崇人(龍谷大学)
5. 10-11世紀、高麗の仏教思想——中国との交流を中心に …………… 佐藤 厚(東洋大学)
6. 日中両天台における教学的な相互交流——源信問・知礼答『答日本国師二十七問』を中心に——
…………… 村上 明也(駒澤大学)

第三部 総合討論：15:15～16:30

主催：中国社会科学学会

◆自由論題研究報告 7月3日(土) 午前の部:10:00~12:30 オンライン開催

◇政略結婚から見る五代十国の王国間関係

劉揚

〔報告要旨〕歴代の中国政権において、婚姻は政権の意向や政治史の動向と密接に関わるものである。例えば先秦時代の諸侯国間の婚姻や中原王朝と異民族政権との間の公主降嫁、あるいは君主が朝臣を籠絡するために行った結婚などが挙げられる。こうした一連の婚姻を政略結婚とみなすとき、五代十国時代の政略結婚は政権が乱立した当時の諸国家間の関係の特質を考察するうえで、注目に値する。とりわけ、岐と前蜀の「成婚前—婚姻—破局」の歴史は、「戦—和—戦」の流れの展開を見せており、婚姻をもって国家関係の強い同盟関係を築いた五代十国時代の婚姻関係を代表している。

本報告は、岐・前蜀の政略結婚を手がかりに、婚姻の背景や双方の人選、さらには婚姻後の両政権の交流、婚姻関係が破綻した後の両政権の対立状況を検討する。そのうえで五代十国時代における、政略結婚の外交的役割、政治同盟締結後の相互の責任や義務、あるいは同盟破綻後の各国の捕虜や敗将に対する処遇など、政治交渉の展開の全面的な究明をめざす。このことは王国間の政治と外交関係の深い理解につながるのみならず、さらには唐帝国滅亡後の中国の新しい国際秩序の姿を再考し、同時期の歴史的な位置づけを捉え直すうえでも重要な意義があると考えられる。

〔報告者紹介〕劉揚(リュウ・ヨウ)、1992年生。専攻は隋唐五代史。中国の首都師範大学修士課程卒。現在東京大学人文社会系研究科博士課程在学。

◇明代紹興の私家園林と園林空間——山陰祁氏の寓園を例として

庄涵淇

〔報告要旨〕明代中期以後、商品経済の発展とともに、江南地域に造園ブームが起こり、私家園林は最盛期を迎えた。紹興は山水風景が優美であり、数多くの私家園林を造営しただけではなく、『越中園林記』のような園林に関する専門的著作も作成された。作者の祁彪佳は明末の著名な士大夫であり、故郷の山陰県在住時に寓園を造るとともに、『寓山注』『日記』をも記している。これらの著作は園林研究に不可欠な史料となっている。本報告は明末の紹興の私家園林である寓園を事例として、明代の私家園林の特徴を確認しながら、社会と深く関わる園林空間の変化や園林の利用に注目する。まず、明代の繁栄していた紹興私家園林に着目し、その分布と特徴を究明した上、更に寓園を代表的な事例にして、園林空間が社会変動に如何に影響されたのかを明らかにする。

〔報告者紹介〕庄涵淇(しょう・かんき)、1989年生。専攻は宋代史。現在大阪市立大学大学院文学研究科博士課程在学。主要論文「宋代の園林と交遊——湖州園林を手がかりとして——」(『都市文化研究』21, 2019年)、「宋代の蘇州園林と士人の交遊」(『人文研究』71, 2020年)、「宋代の紹興園林と園林生活」(『都市文化研究』23, 2021年)など。

◇明末清初における遺民の自己認識——「中華の遺民」と「明の遺民」をめぐって

顧嘉晨

〔報告要旨〕王夫之(1619-1692)は、明末清初における遺民思想家の一人である。彼は漢民族が中華文明の担い手であるという認識から、満洲族を君主に戴く清の中国統治を認めず、遺民として生涯を終えたとされる。

しかし、このような従来の王夫之像は、清末以来の反満革命に応じて取捨選択され、出来上がった人物像にすぎない。それは、明末清初における王夫之の実像からは少し隔たりがあり、後世の理解、意図によって、一方への偏向があったということができる。

本報告は、思想的な角度から、明末清初の歴史背景や王夫之本人の著作などに基づき、「中華の遺民」と「明の遺民」をめぐって、王夫之の遺民像を考察する試論である。それに伴い、明末清初における遺民の自己認識を再考してみようとする試みである。

〔報告者紹介〕 顧嘉晨（こ・かしん）、1994年生。専攻は遺民思想史。東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程修了。現在同専攻博士課程在学。日本学術振興会特別研究員（DC1）。

◆自由論題研究報告 7月3日（土）午後部：13:30～16:50 オンライン開催

◇「読む」とは如何なることか——段玉裁『説文解字注』における「読」をめぐって 建部 良平

〔報告要旨〕 本発表では、段玉裁（1735–1815）『説文解字注』における「読」の項目を用いて、「読む」という営為の考察を試みる。

段玉裁以前の『説文解字』の版本では「読、誦書也」となっていたのに対し、段玉裁はこれを「読、籀書也」と改めている。その理由と解釈を述べる中で、彼は独特の議論を展開しており、木下鉄矢や近藤光男、吉川幸次郎などがこれまで注目してきた。本発表では、最も緻密に分析した木下の議論を下敷きとし、(1)段玉裁が「其の義蘊を抽繹し、無窮に至る、是れを之れ読と謂ふ」と言う所の「無窮に至る」の解釈、(2)当該項目における『史記』からの引用が持つ意味、の二点に留意しながら異なる解釈を試みる。もちろん、議論がこれらに尽きるのではなく、複数の論点が絡み合う中で議論が進むことになるだろう。そしてその過程を通じて、「読む」ことへの問いが、段玉裁を出発点に開かれるのである

〔報告者紹介〕 建部良平（たてべ・りょうへい）、1993年生。明治大学文学部卒。現在東京大学総合文化研究科博士課程在学。専門は東アジア哲学。主要論文に、「他者をその他在において理解する：丸山政治学の現代的読解と「弱い主体」」（『思想史研究』27、2020年）、「「苦海浄土」と共に：狂いと救い、そして笑い」（『EAA Forum 9 石牟礼道子を読む—世界をひらく/漂浪（され）く』、2021年）、「老いた人間は何処へ：段玉裁「四郊小学」説を読む」（『中国哲学研究』31、2021年）など。

◇清末の旅行記から見たインドイメージ 程 善善

〔報告要旨〕 清末において、中国とインドの交流が再開した後、インドに到着した中国人は少なくない。彼らは自分の旅行体験を記した旅行記を作成した。これらのインド旅行記は当時の中国人のインドイメージに大きな影響を与えていたため、当時の中国人のインド認識を知る上で極めて重要な資料である。本報告は清末のインド旅行記を取り扱い、インド旅行記の著者の身分、テキストの特徴、史料としての価値、及びインド旅行記についての先行研究などをまとめて紹介する。その上で、『得一齋雜著』、『南行日記』、『印度遊記』と『乙巳年調査印錫茶務日記』、この四つのインド旅行記に焦点を絞って、それぞれ著者の生涯、インド旅行の動機、旅行記の内容、及びこれらの旅行記の伝播状況について紹介する。これらのインド旅行記の中のインドイメージ

についての考察を通じて、当時の中国社会における思想的な枠組み及びイデオロギー的傾向を窺う。

〔報告者紹介〕程善善（てい・ぜんぜん）、1991年生。専攻は中国近代史。中国南京大学歴史学部卒。現在東京大学大学院人文社会系研究科東アジア思想文化専門分野博士課程在学。主要論文は「清末における『得一齋雑著』の伝播状況について」（『新学衡』第三輯，2018年）。

◇清末中国思想空間の下部構造——雲南留日学生思想形成を手掛かりに

董子昂

〔報告要旨〕本研究では、清末期に雲南省から派遣された留日学生が創刊した雑誌『雲南』（1906年–1911年）をテキストとして、雑誌に含まれた諸思想とそれらが流れるルートを複線的・多重的に跡付けた上で、清末中国の「近代」を支える地方的近代性が雲南に成立する思想経路と内部構造を検討したい。本研究はまず「優勝劣敗」が中核となる「進化」とは異なる、立憲主義に代表される「進歩」の尺度を導入し、「進化」と「進歩」のせめぎ合いから思想形成の複線を辿っていく。また、「近代」の起源としてのヨーロッパの思想的文脈を脱して「近代」を議論することは不可能だと考えられることから、本研究では、「グローバル」な方法を採用し、雲南と西欧という二つの極端な地域単位を有機的に結合させて分析を進める。本研究によって、社会思想史の面で雲南に「近代」が到来する経緯の一端を明らかにすることができると思う。

〔報告者紹介〕董子昂（とう・しこう）、1993年生。専攻は地域研究、メディア史。雲南大学人文学部卒。現在北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士課程在学。主要論文「世紀転換期における雲南の歴史再建：雑誌『雲南』とその増刊『滇粹』を中心に」（『国際広報メディア・観光学ジャーナル』30，2020年）など。

◇蓄音機文化と左翼音楽——1905-1929年の中国文学作品と論争における蓄音機表象と聶耳を中心に

藤東君

〔報告要旨〕本報告では、20世紀初頭の新聞雑誌や、周瘦鵬の短編小説『レコード盤』（1921）、郭沫若と李初梨を中心人物として展開されていた「蓄音機になるかどうか」（1920年代後半）をめぐる論争など、1905–1929年の中国文学作品と論争における蓄音機表象に注目し、蓄音機の「物化」効果が、左翼知識人によって如何に否定的な意味から肯定的な意味へと変更されたのか、そして蓄音機が如何に「革命宣伝の象徴」から「革命文芸理論の象徴」へと位置付けられてきたのか、その過程を明らかにする。後半は左翼音楽人である聶耳を中心に据え、彼が如何に「蓄音機写実論」を自分自身の作曲実践に応用していったのかを示した上で、彼の人民音楽家としての位置付けを蓄音機・レコード産業発展史の文脈の中で再検討する。言い換えれば、本報告は録音と音響複製技術を含む蓄音機文化が左翼音楽の発展に果たした役割を解明する試みである。

〔報告者紹介〕藤東君（とう・そくくん）、1990年生。専攻は中国近代音楽文化史、日中音楽文化比較。華東政法大学人文学部卒。現在東京大学総合文化研究科博士課程在

シンポジウム

五代・宋代における仏教の展開と伝播

2021年7月4日(日) 10:00~16:30 オンライン開催

企画の趣旨

中国仏教の展開の上で注目される画期の一つが五代から宋代に掛けての時代である。この時代に仏教は、前代を継承しつつも大きな変化を作り上げていく。唐代には仏教と道教が社会の中で重要な地位を占めていたが、やがて宋代になると儒教を中心とした社会へと変化していく。そのような中でも、仏教は依然として有力な勢力として、その地位を保っていたが、その内部にはやはり変化が存在したのである。

まず唐代から少しずつ各地に栄えつつあった禅宗の中から新しい動きが現れた。それが法眼宗である。法眼宗は次の時代の優勢な勢力に躍り出るのであるが、その流れの上に、時代の画期となる永明延寿が登場する。延寿は、当時の仏教界の勢力を教宗と禅宗に二分し、その見方が、次代の仏教の見方を規定していくものになった点で注目に値する。

禅宗はその後の展開がよく研究されているが、教宗とされた天台、法相、華嚴にも新たな動きが存在した。なかでも、天台や華嚴に関しては、すでに研究の蓄積があるが、法相に焦点を当てると、実は意外に少ない。資料的な制約が大きいことは否めないが、そのような法相宗の展開について研究の現状を紹介する。

次に五代から宋代にかけて、本土の仏教は周辺国にも影響を与えていったが、その例を北方の契丹、朝鮮半島の高麗、そして日本に探る。契丹の仏教は、日本の院政期に影響を与えていることが指摘され、また朝鮮半島の仏教には、中国南方の呉越国の仏教が影響を与えている。さらに日本の仏教には、中国天台が大きな影響を与えていた。中心と周縁部という視点から見ても、この仏教の与えた影響には興味深いものがある。伝播の上では、国家レベルという視点と、仏教学内部の教学レベルという二つの視点が考えられるが、そのどちらも落とすことができない。ここでは両者を視野に入れながら、とくに後者を文化レベルでの伝播と考えて報告する。本シンポジウムは三部構成で成り立つ。第一部は中国内部でおきた展開を中心に、第二部では周縁部で起きた現象に焦点を当て、第三部では討論を行う。中国仏教を取り巻く研究の現状が明らかにできれば幸いである。

報告要旨

第一部 中国中心部における展開：10:00～12:00

万象明明として理事無し——法眼文益による華嚴思想の援用とその意義

土屋 太祐 (新潟大学)

一般に法眼宗と華嚴思想は深い関係があるとされる。その例の一つとなるのが法眼文益の「華嚴六相義頌」である。この頌の最後の一句は、「万象明明無理事」というものであるが、これは、法眼のかつての師である長慶慧稜の偈の一句、「万象之中独露身」と明らかな対比を示している。法眼は長慶の門下で頭角を現しながら、それとは異なる玄沙師備一羅漢桂琛の法を嗣いだ。玄沙と長慶はともに雪峰義存の法嗣であるが、玄沙の法系はその他の雪峰系禅師とは異なる思想傾向をもち、集団としても独立していった。当然ながら、法眼の嗣法は問題となり、長慶門下の同学から議論を挑まれることになる。その際に問題になったのが、まさに「万象之中独露身」の一句であった。このような経緯から見ても、法眼の「万象明明無理事」の句と長慶の偈を対比的に捉えることは不当ではないだろう。本報告では、雪峰系と玄沙系の分化という文脈から、法眼が華嚴思想を援用した意義を考える。

永明延寿の立ち位置：時代の転換期における禅の捉えなおし

柳 幹康 (東京大学)

本発表では、唐と宋を結ぶ五代十国という一大変革期において、『宗鏡録』がそれまでの禅宗をどのように読み替えたのか、またその著者である呉越国の禅僧永明延寿(904-976)の思想的・歴史的な立ち位置がどのようなものであったのかについて分析を加えるものである。先行研究において延寿は、法眼宗の第三祖として言及・分析されることが多くあったが、その主著『宗鏡録』には法眼宗やそこに属する禅僧への言及は全く見えない。そこで本発表では(1)『宗鏡録』が編纂される以前の呉越国における禅宗の動向を見たうえで、(2)『宗鏡録』に記される延寿の禅宗観を確認し、(3)延寿が『宗鏡録』を編纂した当時の状況について分析を加える。これにより延寿が時代の転換点——国内においては自派の圧倒的優勢が確立するとともに、国外においては弾圧により仏教が甚大な被害を受ける時期——において、仏教内部における自派の優位性の確立ではなく、仏教そのものの保全を目指していたことが明らかになるだろう。

贊寧『宋高僧伝』に見る唐宋期の教学仏教について

吉村 誠 (駒澤大学)

贊寧(919-1001)は、杭州の祥符寺で出家し、天台山に学び、律を中心に仏教全般を究め、儒教や老荘にも通じていた。呉越では長く僧官の最高位である両漸僧統となり、宋の太宗・真宗にも僧録として重用され、勅を奉じて『宋高僧伝』を撰述した。本発表では『宋高僧伝』の義解篇の内容を検討し、贊寧が唐宋の変革期における教学仏教——唯識・華嚴・天台など——をどのように把握していたのかを考察することにした。

第二部 周縁部への影響：13:00～15:00

契丹（遼朝）治下律僧の様態

藤原 崇人（龍谷大学）

10世紀初頭から12世紀前半にかけて、モンゴリア東部とマンチュリア西部そして華北の一部を支配した契丹（遼）が、唐の継承者としての性格を有していたことはよく知られている。仏教信仰の面でも当てはまり、とくに唐以来の華嚴と密教が主流となり、学問のみならず、たとえば仏塔壁面にもこれらの影響を受けた装飾が施されるなど、社会的な広がりが見て取れる。

また律についても、燕京奉福寺の澄淵が『四分律刪繁補闕行事鈔評集記』とその科文を著すなど、唐の南山律の系統を継いでいたことがうかがえる。ただし、当時において律との関わりが顕著な僧たち（便宜上「律僧」とよぶ）の具体的なありようについては、研究が手薄な状況にあり、不明な点が多い。そこで本報告では、契丹皇帝以下の政権支配層ならびに社会と律僧との関係を具体化して、上記の問題の一端を明らかにしたい。あわせて先行研究において所与の事柄として扱われることのある「律宗」の存在についても私見を述べたい。

10-11世紀、高麗の仏教思想——中国との交流を中心に

佐藤 厚（東洋大学）

中国では唐末五代から北宋にあたる10-11世紀は、朝鮮半島では高麗時代の前半期にあたる。この時代の高麗の仏教は中国との交流が盛んであった。10世紀には呉越国との間で、天台宗、法眼宗をめぐる交流が盛んに行われた。11世紀には義天が出て、北宋との間で華嚴宗、天台宗をめぐる交流が盛んで、さらに北方の遼との交流も行われた。発表ではこうした高麗仏教の動向について、高麗仏教自身の展開と、中国仏教に与えた影響という二つの側面から考察したい。

日中両天台における教学的な相互交流——源信問・知礼答『答日本国師二十七問』を中心に——

村上 明也（駒澤大学）

本報告は、源信（942-1017）問・知礼（960-1028）答『答日本国師二十七問』（1003頃）という教義問答書（唐決）を日中両国における教学的な国際交流の顕著な素材として再評価しようとするものである。

従来の研究では、平安時代の浄土教を代表する『往生要集』にのみ注目が集まったためか、宋地へ送られた源信のその他の著述に関する考察が等閑に付されてきた。そこで本報告では、中国から日本という一方向的な伝来のみを想定する、これまでの天台学の見方・枠組みを払拭するべく、源信問・知礼答『答日本国師二十七問』が日中両国に与えた教学的な影響について検討を加えてみたい。以上のような作業を通じて、日中両国が同じ情報（『答日本国師二十七問』）を共有しつつも、それぞれの国において実証的な文献研究を行っていたという事実が明らかになる。具体的には、①入宋僧（寂照や栄西など）を介した日中両国の国際的、双方向的な文献交流の実態、②『答日本国師二十七問』が中国天台の新たな教義的展開を促す、③『答日本国師二十七問』が日本天台の新たな教義的展開を促す、この三点を指摘したい。

[シンポジウム報告者紹介]

◇土屋 太祐（新潟大学教授）

1976年生、茨城県出身。2007年、四川大学文学与新聞学院博士課程修了、文学博士。著書に『北宋禅宗思想及其淵源』（単著、四川出版集団巴蜀書社、2008年）、『新国訳大蔵経・中国撰述部①－6〈禅宗部〉法眼録・無門関』（共訳、大蔵出版、2019年）など。

◇柳 幹康（東京大学准教授）

1981年栃木県生まれ。2013年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』（単著、法藏館、2015年）、『一心万法：延寿学研究』（共著、宗教文化出版社、2018年）、『新国訳大蔵経・中国撰述部①－6〈禅宗部〉法眼録・無門関』（共訳、大蔵出版、2019年）など。

◇吉村 誠（駒澤大学教授）

1969年、東京都生まれ。早稲田大学大学院博士後期課程修了。博士（文学）。現在、駒澤大学教授。著書に『中国唯識思想史研究—玄奘と唯識学派—』（大蔵出版、2013年）、訳書に『続高僧伝Ⅰ』（大蔵出版、2012年）、編著に『玄奘三蔵と薬師寺』（薬師寺、2015年）などがある。

◇藤原 崇人（龍谷大学准教授）

1973年大阪府生まれ。博士（文学）。現在、龍谷大学文学部准教授。専門は10～13世紀を中心とした中国および北アジアの仏教史。主な論著に『契丹仏教史の研究』（単著、法藏館、2015年）、『アジア仏教美術論集 東アジアⅣ 南宋・大理・金』（共著、中央公論美術出版、2020年）、『アジア仏教美術論集 東アジアⅢ 五代・北宋・遼・西夏』（同上、2021年）、『神仏融合の東アジア史』（共著、名古屋大学出版会、2021年）など。

◇佐藤 厚（東洋大学講師）

1967年生、山形県出身。1998年、東洋大学大学院博士後期課程修了、博士（文学）。著書に『はじめての韓国仏教—歴史と現在』（単著、佼成出版社、2019年）、訳書に『韓国仏教史』（単著、春秋社、2014年）、『現代語訳：仏教活論序論』（大東出版社、2012年）、などがある。

◇村上 明也（駒澤大学専任講師）

駒澤大学専任講師。龍谷大学大学院文学研究科博士課程（仏教学専攻）修了、博士（文学）。専門は東アジアの仏教思想。編著に『源信撰『阿弥陀経略記』の訳注研究』（村上明也・吉田慈順編、法藏館、2020年）、共著に『蔵俊撰『仏性論文集』の研究』（楠淳證・舩田淳一編、2019年、法藏館）など。